

心理学部誕生

大学文学部教授 余 語 真 夫

同志社大学の12番目の学部として2009年4月に心理学部心理学科が京田辺キャンパスに開設されることになった。大学院心理学研究科心理学専攻博士課程前期課程と後期課程も開設される。学部の学生定員は150名、大学院の学生定員は前期課程が10名、後期課程が5名であり、専任教員数は18名である。本稿では心理学部開設に至る歴史の経緯と、心理学部の特色について紹介させていただく。

心理学教育 高等教育機関における心理学という学問分野の成立は、ウイルヘルム・ヴント (Wilhelm Wundt) がライプツィヒ大学に心理学実験室を創設した1879年であるとされるが、現代心理学の基本的研究課題の多くはすでに紀元前のプラトンの思索に表れている。心理学は人がどのようにものごとを考えたり、感じたり、行動したりするのかを記述して説明するサイエンスの一分野として発展していつている。

現代心理学は、心理学独自の知識・技術体系を基盤にして、さまざまな学問の最新の知見を取り込みながら、精神と行動の性質や作用について説明を試みている。そこでは脳を含む身体備えた心理学的尺度や生体指標、行動指標で測定し、統計学を用いて、変数間の相関関係や因果関係について数量的に解析していく。

大学における心理学教育の重要な目標は、人間行動を説明する理論を学び、その理論の有効性を確かめるための仮説検証研究を実施する測定スキルや解析スキルを修得することであり、さらに人間行動を説明し、問題解決を促進するコミュニケーション・スキルを養成することである。

心理学部の由来 本学における心理学の研究・教育の起源は、同志社大学の前身である官許同志社英学校までさかのぼることができる。新島襄が1875年8月に京都府庁に提出した「私塾開業願書」には開講科目の一つとして「性理学」(心理学)が記されている(同志社百年史 資料編)。

同志社英学校の最初の学生の一人であった元良勇次郎(1858-1912年)は、ジョンズ・ホプキンス大学でPh.Dを受け、帰国後に東京帝国大学の初代教授となり、わが国の心理学の研究・教育を拓いた。草創期の同志社英学校で学んだもう一人の学生、松本亦太郎(1865-1943)は、ライプツィヒ大学、イェール大学で実験心理学を修め、後に京都帝国大学の初代教授となり、日本心理学会を創設した。同志社英学校の草創期の学生のなかから、現代心理学の礎を築いた人物が現れたことは、同志社史上そしてわが国の心理学史上記念されるべきことであろう。

同志社大学で心理学の研究・教育が組織的に始まったのは、文学部哲学科に心理学専攻が設置された1927年のことであ

がいかにして情動や記憶、感覚経験などの精神現象を生じさせるのか(神経科学的視座)、行動や性格傾向が自然淘汰されてきた可能性があるのか(進化生物学的視座)、遺伝子と生活環境はどの程度個人差を説明するのか(行動遺伝学的視座)、無意識の動因や葛藤によって行動がどのように影響を受けるのか(精神力動論的視座)、行動がどのように経験によって形成されるのか(学習論的視座)、情報をどのように符号化し、処理し、貯蔵し、再生するのか(認知論的視座)、そして社会的状況や文化によって行動や思考様式がどれほど影響を受けるのか(社会・文化論的視座)というように、さまざまな視座が導入される。

心理学の基本的な研究過程は、「理論」から検証可能な「仮説」を設定し、現実の人々の思考・感情・行動を観察して「仮説」を検証し、「理論」を修正する、という循環で進行する。観察では「事例研究法」、「調査法」、「自然観察法」、「実験計画法」などを目的に応じて利用する。典型的には、人々の意識状態や思考様式、感情、感覚経験、行動様式を妥当性と信頼性を本学における心理学実験室の礎を築いた。

その後の経緯の詳細な説明は同志社百年史および同志社大学心理学研究室六十年史に譲るが、心理学専攻は太平洋戦争の影響で一時消滅し、1948年の新制大学の発足とともに、文学部文科学科教育学及び心理学専攻として再出発した。遠藤汪吉(1905-1992)を中心に、松山義則(1923-)、野辺地正之(1921-2005)、濱治世(1927-2005)、秋田清(1942-)、小嶋外弘(1925-2004)によって心理学の研究・教育体制が強化されてゆき、1961年に大学院文学研究科に心理学専攻修士課程、また1964年に心理学専攻博士課程が設置された。1967年には文学部文科学科において教育学専攻と心理学専攻が分離された。1972年には遠藤汪吉が退職し、1970年代の心理学専攻の研究・教育は、松山義則のリーダーシップのもと、野辺地正之、濱治世、秋田清、小嶋外弘、岡市廣成、山内弘継、橋本幸によって展開された。

1980年代には秋田清が退職し、鈴木直人が専任教員に加わった。1986年には京田辺校地開校にともない京田辺心理学実験室が設置され、今出川校地の心理学実験室は徳照館地下

心理学部カリキュラム

履修プロセス		1年次	2年次	3年次	4年次
必修科目	講義系	心理学概論	心理学研究法	認知・感情・適応の心理学	
		心理学統計法／外国書講読			
	演習系	ファーストイヤーセミナー			演習（ゼミ） 卒業論文
	実習系	心理学実験演習	臨床心理学実習	心理学データ解析実習	
選択必修科目	実習系		心理学実験プロジェクト演習（認知）	神経・行動心理学実験演習	
			心理学実験プロジェクト演習（感情）	臨床・社会心理学実験演習	
			心理学実験プロジェクト演習（適応）	発達・教育心理学実験演習	
選択科目	神経・行動		生理心理学／感情心理学／スポーツ心理学／学習心理学／神経情報科学／認知心理学／行動分析学／精神生理学／比較認知心理学		
	臨床・社会		臨床心理学／心理療法／交通心理学／パーソナリティ心理学／精神病理学／安全・安心の心理学／健康心理学／実験社会心理学／環境心理学／産業・組織心理学／臨床社会心理学／犯罪心理学		
	発達・教育		発達心理学／臨床発達心理学／家族心理学／乳幼児心理学／学校心理学／高齢者心理学／教育心理学／生徒・進路指導の研究／ヒューマン・モチベーション／発達と学習の心理学／学校カウンセリング		
	共通	心理学情報機器基礎	心理学史／心理学特論／多変量解析法の基礎		

第二に、カリキュラム編成では、「神経・行動心理学コース」「教育・発達心理学コース」「臨床・社会心理学コース」という3類型6領域の講義・演習・実習科目を体系化したことである。それによって学生は目的・計画的に履修することが可能になる。

第3に、演習系、実習系の科目を強化することである。学生が心理学の実証性を体得するためにそれらの科目を充実させることが必須である。同志社大学では、全学共通教養科目の「プロジェクト科目」、大学院文学研究科心理学専攻の「研究センター連携型オープンフィールド教育」

一階に集約された。

1990年代になると、野辺地正之、小嶋外弘、松山義則、濱治世が退職し、1950年代生まれの内山伊知郎と佐藤豪、1960年代生まれの余語真夫と青山謙二郎が専任教員に加わった。2005年には文学部の改組により心理学部が設置され、1970年代生まれの田中あゆみと谷口弘一が加わった。その後、山内弘継、橋本宰、岡市廣成が退職し、1960年代生まれの杉若弘子が加わった。

2005年には、心理学部が主体となつて同志社大学研究開発推進機構に「こころの生涯発達研究センター」と「感情・ストレス・健康研究センター」を設置し、産学連携研究や国内外共同研究を展開する活動拠点形成に取り組んでいる。

2008年現在の心理学部の専任教員は鈴木直人、佐藤豪、内山伊知郎、杉若弘子、余語真夫、青山謙二郎の6名の教授、畑敏道准教授、谷口弘一講師および田中あゆみ講師の計9名であり、このメンバーによって心理学部設置の準備を進めている。

本学の心理学研究・教育は、1927年の心理学実験室開設以来、実験心理学の方法論に基づいて精神活動と行動のメカニズムと作用を究明しようとするものである。また心理学の基礎研究領域と臨床・実践領域のインターフェイスとなる実証研究と教育に取り組むことも本学科の特色である。松山義則による「異常行動論」や「不安の研究」、濱治世による「実験異常心理学」などの著作は、今日の感情科学 (Affective Science) や実証主義的臨床心理学・精神病理学の先駆的研究成果であり、現在の専任教員や大学院生もそれらに続く研究成果をあげている。

心理学部開設構想 本学の心理学の研究・教育は、実証性を重んじる世界の心理学研究・教育の進歩と協奏しながら発展し続けている。心理学の第一の目的は心と行動の基本的性質と法則性を、実験や調査、観察などを通して実証していくことである。心理学の第二の目的は、心と行動に関する臨床・応用研究と実践活動を実証主義的に展開することである。

これらの第一の目的と第二の目的を達成しようとする知的営みは、心と行動を理解するために不可欠な車の両輪であり、両輪の軸は実証性である。臨床心理学と実験心理学は相容れないという考えもあろうが、心と行動の不適応の診断、形成メカニズム、予防・治療・ケアを扱う臨床心理学に実証性をもたせることは、今や世界的潮流である。

本学では今出川キャンパスと京田辺キャンパスの設置学部の再編と学部新設計画が進行している。実証性を重んじる本学の心理学の研究・教育、臨床実践活動をさらに興行きと広がりのあるものにし、現代的課題に柔軟かつ創造的に対応する心理学研究・教育の拠点校としてプレゼンスを国内外に示すために、われわれは心理学部を学部として独立させ機動力を増すことが望ましいと考えた。その方向性は幸いにも全学の合意を得ることができ、心理学部開設が実現する運びとなった。

心理学部の特色 心理学部の特色はたくさんある。以下では主な特色を7点紹介しよう。

第一に、文学部で培われた「専門教育を幹にした教養教育」という教育理念を継承し、実証性を軸にした心理学の研究と教育をさらに推し進めることである。

(文部科学省大学院教育改革支援プログラム選定) など、旧来の大学教育のあり方を革新する教育が開発・実施されている。心理学部では学生が学外の現場に向き、様々な人びとの交流の中で研究課題を発見し、問題解決を図る「心理学プロジェクト演習」を必修科目として導入する。

21世紀社会では、異なる分野の専門家が協働し、また専門家と一般市民が協働してサイエンスを発展させ、現実世界の諸問題に対処していく機会が増大していくものと予想される。同志社大学が推進するプロジェクト型教育は、学生の問題設定能力、計画立案能力、組織運営力、コミュニケーション能力を強化する効果的な方法論である。

第4に、実証的臨床心理学の分野をいっそう強化する。京都には臨床心理学の分野では実績を誇る大学が多数存在する。そのなかで、本学の心理学部(および大学院心理学研究科)は、これまでの実証的臨床心理学の研究と教育の伝統と実績、特に医療心理学、健康心理学、行動医学の研究と教育を継承発展させる。欧米では確立している「科学者―実践家モデル」と「生物―心理―社会モデル」に基づいた臨床心理学の研究・教育・実践を推進し、広い意味で医療に貢献する研究者と臨床家の養成を図る。なお、数年後に、大学院心理学専攻に臨床心理士養成課程を開設し、附属心理相談センターを開設する構想もある。また臨床心理学の基礎研究と臨床・実践活動、教育の促進のために、京都府下および滋賀県、奈良県、大阪府など近隣府県の大学医学部、大学附属病院、医療法人、社会福祉法人、学校法人、企業、NPO団体との提携関係を確立する準備が進んでいる。

る。

第5に、動物飼育室、薬品管理室、環境刺激制御と生体機能モニタリング装置、内分泌・免疫物質解析装置などを含め、世界的にもトップクラスの最新の実験室と実験機器・設備を整備し、多様な研究課題に対応できる研究教育環境を実現する。

第6に、京田辺キャンパスの諸学部との連携の強化である。京田辺キャンパスには2005年に文化情報学部、2008年に生命医科学部とスポーツ健康科学部が開設され、工学部は理学部へと名称変更・改組再編した。これらの学部群の研究・教育は、いずれも実証主義に徹するサイエンスという知の体系で結ばれている。心理学部はそれらの諸学部と連携して、生命と環境のトランスアクションに関する新しい知と生活技術の創造を図るフロンティア精神に富んだ研究・教育を推進する。

第7として、学部入学試験の多様化である。一般選抜入学試験(全学部日程文系・理系、学部別日程)、大学入試センター試験を利用する入学試験、AO入試、スポーツ推薦選抜試験、留學生入学試験、指定校推薦入学制度、法人内諸学校推薦入学制度、キリスト教主義学校の連携ネットワーク推薦入学制度、3年次編入学試験を実施する。

以上に述べた主な特色により、心理学部は、キリスト教主義教育の理念とあわせて新島襄が重視したサイエンス教育の発展に寄与し、同志社大学が世界に貢献する可能性を広げるものと確信する。校友、同窓、在学生、ご父母、法人内諸学校教職員の皆様には心理学部の研究と教育へのご理解とご支援を賜りたく、お願いを申し上げます。

政策生のリアルな姿をWebで公開！ 『ポリスタ24hours』

大学政策学部教授 多田 実

学部公式サイトでのキラークンテンツ

政策学部 (Faculty of Policy Studies) の公式サイトにおいて、いわゆる「キラークンテンツ」(おそらくこれがないとアクセス数は激減してしまうと思われる一番人気のコンテンツ)として不動の地位を築いている『ポリスタ24hours』(以下、「ポリスタ」と略記)。今年で4年目となるこの企画は、政策学部の学生スタッフが、学部の広報活動の一環を担うという意識の下、彼らのキャンパスライフにおける様々な出来事を携帯電話のメール機能で綴るモバイルブログです(現時点での投稿総数は約700件)。その読者層は同志社大学政策学部の受験を考えている高校生を想定しており、彼らを主なターゲットとして位置づけるため、世間一般のブログとは少し異なるアプローチで運営しています。

今どきの高校生には…

ニケーションスキルのトレーニングにもなっているでしょう。

運営体制も進化して…

ポリスタの記事は学部公式サイトで公開しますので、不適切な表現はもちろん、肖像権、著作権などのチェックは不可欠です。ポリスタは学部広報の一環ということで「学部広報委員会」から数名担当教員が関与しているのですが、日々の投稿に関しては、本学部サイトの管理をお願いしている「Webサイトサポート業者」に運営マネジメントの大半を委ねています(ちなみに、この体制でこれまで大きなトラブルは起こっていません)。学生スタッフは毎年春に学部サイトで10人程度公募しています。3年目の昨年度からはこの活動も軌道に乗ってきたことを考慮し、ポリスタの経験がある学生が「コアスタッフ」としてポリスタスタッフのリーダー的役割を担ってくれるようになりました。その結果、広報委員の教員はより安心してポリスタの記事を「楽しむ」ことができるようになり、年度末に実施される「コンテンツアワード」(学部広報に貢献度の高い記事を表彰)の審査員としての役割に専念できるようになりました。

学生スタッフの主体性により…

まだまだ歴史が浅い政策学部ですが、過去の伝統や縛りがない分、自由な発想で新たな道を切り拓いていくことができる学部です。学部生が自分たちで考えて出来上がった学部独自のイベントやサークルなどはその典型ですが、昨年度、ポリスタからも新たな企画が生まれました。政策学部が同志社大学55年ぶ

90%以上の高校生が自分専用の携帯電話を所有しているといわれる現在、登下校の電車の中で熱心に携帯電話を操作する高校生の姿は日常よく見る光景です。最近の若者は新聞や本を読まなくなつたという指摘は、今も昔も変わらないような気がするのですが、今どきの高校生は、携帯メールによって、文章の読み書きの量は昔よりもむしろ増えているように思います(正しい日本語できちんと構成された論理的な文章ではないかもしれませんが…)。

そこで、レポートのようなワープロ原稿ではなく、あえて携帯電話のメール機能を使ってサーバーに投稿するというスタイルで、政策学部生の日常生活における「普段着の姿」がポリスタの日記(記事)としてアップされます(内容に関する携帯カメラの写真を添付して)。この方法により、様々な「現場」からの臨場感溢れる「ライブ」な感覚が伝えられるのです。高校生が読みやすい表現で自分の伝えたいことを簡潔にメールで記すことは意外と難しく、学生スタッフにとってある種のコミュ

りの新設学部であることにちなんだ「政策学部GO!GO!」という名の特別企画。政策学部生55人が、様々なテーマから受験生・高校生にメッセージを送る期間限定ブログです(現在も学部サイト「ピックアップ」(二覧)から閲覧可能)。

先日、4年目の学生スタッフとの「顔合わせミーティング」がありました。広報委員からの挨拶の後、スタッフ全員に簡単な自己紹介をしてもらったのですが、「受験生のときポリスタが励みになったので入学したら絶対応募しよう」と…にはとても感動しました。そんな彼らが参加し主体的に運営するポリスタ。今後、もっともっと進化していくことを期待しています。



コアスタッフによるオープンキャンパスでの広報活動



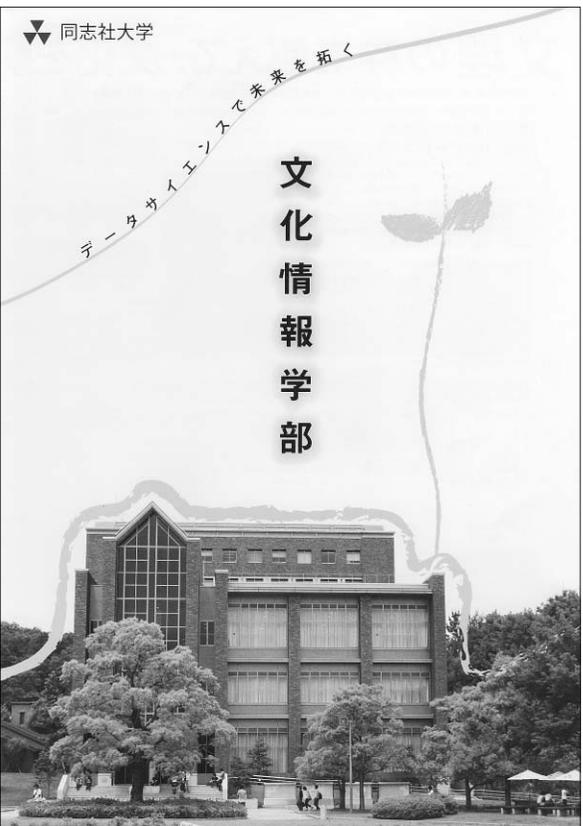
2007年度「ポリスタコンテンツアワード」表彰式

同志社大学文化情報学部 新カリキュラム2009年度より始動

新パンフレットは学生のデザイン

イエローのラインが、文化情報学部のある夢告館の建物から空へと上昇し、ゆるやかに双葉となつて、さらに上へと伸びていく。今年、完成年度を迎えた文化情報学部では、2009年度から、新カリキュラムをスタートさせる。それにもない、このほど学部パンフレットも一新された。

デザインしたのは、文化情報学研究科博士課程（前期）1年の家村祐香さん。「文系と理系の両方の学問分野から、栄養分をたっぷり吸収して、新しい学問の芽がすくすくと育つイメージを表現したかった」という家村さんは、大学院で江戸時代の京都の美術を学んでいる。



「選択科目」の充実

—文系・理系の学問をより体系的に学ぶ—

私たちは常日頃、人間そのものの、あるいは人間の創り出した文化について、どれくらい理解しているだろうか。とくに、現代のような高度情報化社会においては、膨大なデータに埋没し、身動きできなくなってしまうことも少なくない。

文化情報学部では、過去から現在に至る、人間が生み出した大量で雑多な文化事象を扱う。それらを適切にデータ化し、収集・整理・分析するために、情報科学の手法を学ぶ。これが開設以来変わらぬ本学部の学問の特色だ。

さて、新カリキュラムにおいて目をみはるのは「選択科目」の充実ぶりだ。文理融合の「トピックス科目」の他は、文系と理系、それぞれの学問領域ごとに「文化クラスター科目」「データサイエンス科目」として、わかりやすく整理された。

「文化クラスター科目」は、さらに「文化科目」「言語科目」「人間行動科目」「人間社会科目」に、また、「データサイエンス科目」は、「データ分析科目」「情報・コンピュータ科目」「基礎数理科目」に分かれる。

学生は、「文化クラスター科目」「データサイエンス科目」から、自分の興味に応じて、それぞれバランスよく授業を選択すること、体系的に学びやすくなったわけである（詳細については、学部パンフレットを参照されたい）。

これまで本学部には、入学後も数学を重視するイメージが、

一部であったようだが、新カリキュラムでは、学生ひとりひとりの個性に合った授業を選ぶ自由度が、格段に増している。

文化情報学部の未来は学生とともに

「文化事象を幅広く研究対象とする」「文系学問も理系学問も学べる」ということは、ともすれば、「何を勉強しているのか、何を身に付けていけばいいのかわからない」という学生を生む。新カリキュラム作成に際しては、現行のカリキュラムに対する学生の意見をアンケート調査し、その結果を踏まえて、検討を重ねた。

開設以来の「文化を科学する」という理念のもと、文系・理系、それぞれの科目を体系化し、しっかりと積み重ねた上で、文理の壁を越えた学生参加型の授業へと発展させていく。教育課程検討委員会委員の下嶋篤教授（大学文化情報学部）は、「変わりゆく状況を分析し、問題の解決法を自ら考え出し、それを人に説明できる人材（シンボリック・アナリスト）を育てたいのです」と話す。

もちろん、新しい試みには、実際にやってみなければわからない部分がある。けれども、教員と学生が一体となって柔軟に問題点を解決していく文化情報学部の「伝統」は、今後も、学部を動かすエネルギーとなつて受け継がれていくことだろう。

同志社高校生ボクサー
全国インターハイへ

高等学校教諭 藤原享和

本校始まって以来の快挙

2008年5月19日付の京都新聞に「同志社勢二階級制す」の活字が踊った。前日に京都府予選で同志社高校3年生松原悠真君がライントウエルター級で、吹田隆有君がライトフライ級でそれぞれ見事優勝し、全国インターハイへの出場を決めたのである。6月に行われた近畿高等学校ボクシング選手権大会においても松原君は優勝、吹田君は準優勝と華々しい活躍をし、全国インターハイへの弾みをつけた。同志社高校にボクシング部はなく、2人は京都西院ボクシングジムで練習を積み、今回の成果を上げたのである。ジムの先生の熱心な指導には頭が下がる。勿論、同志社高校からボクシング競技での全国インターハイ出場は初めてである。

二人の素顔

松原悠真君は同志社中学校の出身で、中学時代は野球部に所

属していたが、高校では「坊主頭がいやで」野球部には入らなかった。生まれながらの格闘技好きの性格に加えて友人がボクシングをやっていたことから興味をもち、中学3年生の12月にジムの門を叩いた。最初は両親から反対されたが、徐々に認めてもらえるようになり、高校1年の夏休み頃から真剣に打ち込むようになった。結果が出るようになってからは両親とも応援してくれている。大学でボクシングを続けるかどうかはインターハイの後で考えるところとして、今はインターハイ優勝のみを目指して無心に練習を続けている。ボクシングで学んだことは「礼儀」と「一生懸命やれば結果が出るということ」である。

吹田隆有君は京都市立旭丘中学校の出身で、中学時代は陸上競技部に所属し、中長距離の選手として活躍していた。中学3年生の時には1、500メートル走で京都の決勝にまで残ったこともある。高校1年生の時、「はじめの一步」(ボクシングマング)でボクシングに興味を持ち、たまたま同じクラスにいた松原君と一緒に京都西院ボクシングジムに見学に行き、そのまま同じジムに入った。高校でも陸上競技は続けていたが、ボクシ

ングに専念するため退部した。インターハイ優勝を目指し、その後は大学でもボクシングを続けたいと思っている。特に同志社大学は近畿一部リーグの強豪大学なので、メンバーに入れることを夢見ている。ボクシングで身につけたことは「礼儀」、「根性」、「筋力」である。

高校スポーツとしてのボクシング

先述の通り同志社高校にボクシング部はないが、私は昨年度生徒主任をしていた経緯から、2人が2年生の時から京都府の試合に付き添い教員として同行してきた。私自身、プロボクシングをたまにテレビ観戦する程度で、アマチュアボクシングについては何の基礎知識も持ち合わせていなかったのであるが、初めて高校生のボクシングというものを見たときの驚きは今も新鮮である。実に礼儀正しく、応援も整然と行われ、パンチが的確にヒットすると相手が倒れなくてもレフェリーはすぐさまダウンをとる。「ボクシングは危険なもの」という先入観はすぐに解消された。「相手を華々しくリングに沈め勝ち誇る勝者と顔を腫らした哀れむべき敗者」というテレビで見るボクシングの姿とは全く違う、フェアで極めて安全なポイント制のスポーツそのものである。学校での勉強を終えてから毎日厳しい練習に耐え、終了のゴングが鳴るまで全力で競技する彼らは最近世間を騒がせたダーティーなプロボクサーと同世代である。私はすっかりこのすばらしい高校ボクシングのファンになってしまった。最後になって恐縮であるが、彼らを育ててくださった京都西院ボクシングジムの指導者の方々、特に以前は高

等学校で国語科教員をなさっていたというジム設立者の鈴木健一郎会長に深く御礼を申し上げる次第である。本稿作成のため私が2人の選手に話を聞いたとき「これだけは是非書いてほしいということがありますか。」と尋ねると、松原君は「京都西院ボクシングジムのおかげです」、吹田君は「京都西院ボクシングジムに是非入ってください。」と迷わず述べた。



松原悠真君

吹田隆有君

同志社小学校における法教育の取組み

小学校教諭 田中 雅 裕

1 はじめに

法務省の法教育研究会によると、法教育とは、「法律専門家ではない一般の人々が、法や司法制度、これらの基礎になつていく価値を理解し、法的なものの考え方を身に付けるための教育」であり、法律の条文についての知識を得たり、法解釈を学んだりするものではない。2007年度、大学法学部深田三徳教授、濱真一郎准教授の協力を得て実践した法教育について紹介したい。

2 小学校における法教育の意義

(1) 「きまり」に気付く

小学生の子どもたちを相手に「法の意義」を説いても、法に対する近寄り難いイメージを増幅させるだけで、かえって逆効果になりかねない。

子どもたちは、家族や友達とのくらしの中で、無意識のうちにルールに依存したり、ルールを作ったりしている。「ルール

がなければ楽しくない。もめごとが起こる。」から「ルールを決めよう」と、自分たちの困り感や必要感から生み出したルールは守ろうとする。また既存のルールや他者が作ったルールに對しても、年齢が上がるにつれて徐々に批判的にとらえ始めるものの、ある程度は素直に受け入れる。

このような小学生の子どもたちを対象とした法教育で大切なことは、身の回りにはさまざまな「きまり」があること、「きまり」は私たちのくらしを縛るものではなく、楽しく幸せにするものであること、自分たちに必要な「きまり」は自分たちで作ったり、変えたりすることができること、そして「きまり」は守らなければならないことについて理解していくことであると考える。自分たちで決めた以上、自分たちには「きまり」を守るべき責任があるという関係について理解することは、自由と責任の関係を感得することにもつながるであろう。

(2) 生きる力を育む

小学校教育においては、社会の中で人間として生きていくた

めに大切な情操・人間性の基礎を育むことが求められる。本校では、キリスト教主義に基づく「良心教育」を柱とし、6年間を通じて豊かな心や人間性を育むことを特に重視している。

この点、法教育では「法的なものの考え方」や「法やルールの背景にある価値観」などはもちろん、その前段階で、相手の気持ちや思いやる、相手の立場に立つて考え行動するなど、人間関係を築き、一人の人間として生きていく上で大切なことを学ぶことができる。また、相手の考えを受け入れたり、自分の考えを伝えたりすることで、考える力や判断力、問題解決力も育成されるであろう。

本校の理念と法教育の目指すものとは高い親和性があり、法教育は「良心教育」の中で大きな役割を果たすものと思われる。

(3) よりよい社会を目指す意欲を高める

本校では、授業や行事、毎日の清掃活動など、学校生活のさまざまな場面で「めあて」を立て、「ふり返り」をするという取組みを行っている。これは、目標設定と事後反省という作業を通じて、よりよい学校生活を子どもたち自身の力で追求させることにより、やがて成長して社会の担い手となったとき、よりよい社会を自らの手でつくりあげることができる力を身につけることを目的としている。

法教育は、ここでも本校の取組みと親和性がある。自分たちが作った「きまり」であっても、既存の与えられた「きまり」であっても、必ず「ふり返り」を行い、よりよいものに変えていくことができるという体験を、学級や学校という「社会」で積み重ねていくことを通じて、よりよい社会を目指す意欲を高

めることができると思われる。

3 成果と課題

「わたしは、ルールは「なんであるの」「なんで守らないといけないの」と思っていたけれど、約束を守ることで人は自由に生きることができると聞き、自由のためにも必要なんだと思いました。」(児童の作文より)

今回の取組みで、子どもたちは前述の「身の回りにはさまざまな「きまり」があること、「きまり」は私たちのくらしを縛るものではなく、楽しく幸せにするものであること」に気付くことができた。一方、課題としては、①講義中心の学習ではなく、「体験型」の学習プログラムを取り入れ、いろいろな立場や主張を調整しながら、自分たちで問題を解決したり、ルールを作ったりする経験を重ねていくこと、②各学年において身につけたい力を明確にしつつ、発達段階に応じた系統的なカリキュラムを構築していくこと、③人間は当然弱さも持ち合わせており、ルールを守ることの大切さは分かっている、つい守れなかったり、破ってしまったたりする子どもが排除されないことがないよう、一人ひとりが認められる「学級づくり」「仲間づくり」をすすめていくこと、等が挙げられる。

4 おわりに

法やきまりは、多様な人々が共存し、人間としての尊厳を守るためのものであり、「人一人は大切」という新島精神にもつながる。「良心教育」を担う一部分として、小学校独自の法教育をつくりあげていきたい。